

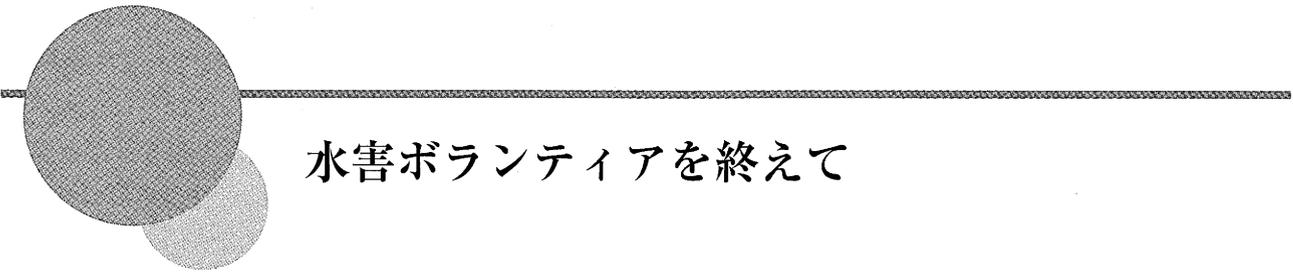
でした。初めは掘っても掘っても泥ばかりで、作業の終わりに砂利がでてくるまでは、もともと底は土でできているのかと思うほどでした。しかし、ボランティア参加者全員が総がかりで数時間掘っていくうちに、少しずつ砂利が出てきて水の流れが見違えるほど良くなっていきました。住民の方にも喜んでいただいとてもうれしかったです。

住民の方々は、農業用水路の他にも片付けや今後農地や作付けをどうするか等、大変な思いをされていたと思います。また、心理的な面でも、水害によるショックなど回復していくのに時間がかかった

りするかもしれません。それにもかかわらず、その強く生きようとする姿に私達の方こそ励まされたような気がします。

今回の水害ボランティアの参加で、少しでも住民の方々の力になれば幸いです。

これからまた作付けの季節が始まりますが、今でも一部崩れかけた田んぼのことを思うと、また元のような農業ができることを願うばかりです。住民の方々の心やその地域の農業環境が、一刻も早く本当の意味で回復していくことを願っています。



## 水害ボランティアを終えて

農業生産科学科 3年 荒井佑介

私はあまり行動的な人間ではないと思います。今回の水害ボランティア（正確には土砂崩れによって埋まってしまった水路のドブさらいですが）に参加した理由も、少し興味があったことと、研究室の要請で流れるままに参加という面が強かったように思います。

当日の作業は、炎天下の中ひたすらに土砂を掬い出す作業で、ほとんどの人が辛いと思うようなボランティア作業でした。ただ、作業終了後に、周辺の被害に遭った田んぼなどを見て回ったのですが、被害の重大さをようやく認識し始めました。それまで私が作業していた場所が水路だったこともあって、それまでは農家の被害の程度を具体的に考えづらかったのですが、根基の土壌から崩れた田んぼを見て、被害の大きさを知ると共に、その農家の今後を考えるとぞっとしました。主な収入源であると思われる田んぼが崩れることは、単に修繕費が多く必要になるだけでなく、これからの収入源を突然失った事を意味します。その時、新聞等で流れていた農業被害

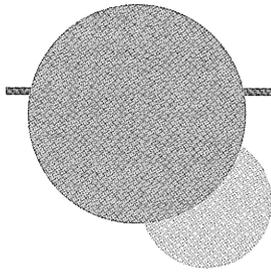
金額を思い返し、現場の人のダメージを強く実感しました。動機がどのようなものであっても現場に行き、見て、話を聞くことは、確かに災害を理解することにつながると感じました。私自身も含めて、メディアを通しての情報だけで被害を知っていると思いこんでいる人が、多いのではないのでしょうか。ボランティアでなくとも災害が起こった時、現場で得るものは大きいと思います。

もちろん、全ての人がボランティアに行くことは、時間的な面、機会的な面で不可能であると思いますが、その両面で参加しやすく、刺激を受けやすい学生が参加することは、今後、災害が起こった時、物事の見方が変わりメリットの強い体験になるのではないかと思います。

また、今回の大学の災害に対する反応はとても早く、モチベーションの高いものであり、公的機関の対応も阪神大震災での教訓を生かした迅速な対応であったと聞きます。しかしそれでも被害現場とボランティアに行く側との考えが完全に一致することは

難しく、効率的に運営されなかった部分が多かったようです。今回のような災害が起こった際の対応に

ついて大学、公的機関も含めて今後さらに練っておく必要があるように感じました。



## 地震災害ボランティアに参加して

自然科学研究科修士2年 松田武嗣

10月23日中越地震発生時、私は酒屋でアルバイトをしていた。目の前で棚から酒瓶が次々と落下し、大変な地震であると感じた。その後、不安を抱えながらアパートに帰ったが、なんら被害はなく、地震があったことなど忘れて遊びに出た。しかし次の日、親戚や友人からの連絡と大々的に放送されるニュースを見て愕然となった。自分のアパートから数十キロしか離れていない地域では、崖が崩れ、民家は倒壊して大きな被害が出ていたのである。そのため何か手伝えることがあればやりたいとは考えたが、一人でボランティア活動に参加する気にもなれずにいた。そんな時、「農学部のボランティア活動の先発隊として小国町へ行かないか。」という連絡があり、すぐ参加することに決めた。

ボランティア活動当日、小国町へ向かう途中にあるきれいに整備されていたはずのバイパスは、所々陥没して大きく波を打っていた。そして更に近づいていくにつれて、電信柱は傾き、川沿いの道は崩れ落ち、人々が片付けにおわれている様子が多くなっていった。

やっとのことで小国町役場に到着したが、ボランティア活動の登録をする際に「もうボランティアのするようなことはありません」と言われた。来る途中にあれだけの光景が広がっていたにもかかわらず、なぜやることがないのか不思議だった。そうは言われたものの何かすることはできないかと森光集落へ行き、集落内を回ってみると確かに民家は傾き、道路は崩れている。これでもやることはできないのかと住

民の方と話をし、ひび割れて陥没した公園の補修と、崩れた石垣の撤去作業を行うことになった。降りしきる雨の中、公園にブルーシートを張り、用水路に落ちた石垣の引上げを行い、一日目の作業は無事に終了したが、なぜ民家の片付けの手伝いがなかったのか疑問だった。

二日目は山間部にある集落に行き、活動を行うこととなった。その集落は、山は崩れ、十戸程度ある民家のほとんどが基礎からずれる等の大きな被害を受けており、このままでは集落自体がなくなる可能性すらあるという状況におかれていた。

その集落を回り、住民の方に何か手伝いできることはないかと聞くと、「自分達でも何をしたいかわからないので、ボランティアの人達に何かしてくださいと指示は出せない。けれども、嫁入りの時に持ってきた箆笥を二階から運び出してほしい。」と言われたため、家の中に入れてもらうことになった。家の中に入ってみると、窓は割れ、家財道具は散乱しており、正しく足の踏み場もないと言うのに相応しかった。

この時、「自分達でも何をしたいかわからないので、ボランティアの人達に何かしてくださいと指示は出せない。」と言われたことと、自分の目で荒果てた民家の中を見たことで、なぜ一日目に民家の片付けの手伝いがなかったのかが理解できた。住民の方はやるが多すぎて何から手をつけていいのか分からず、指示が出せないために民家内での作業がなかったのである。その理解によって、私は役